

DANCE

MAGAZINE

ダンスマガジン



創立20周年特別企画

熊川哲也 &

Kバレエカンパニー

栄光の20年、そして未来へ

公演レポート

エイフマン・バレエ

「ロダン」「アンナ・カレーニナ」

マシユール・ボーン

「白鳥の湖」

10

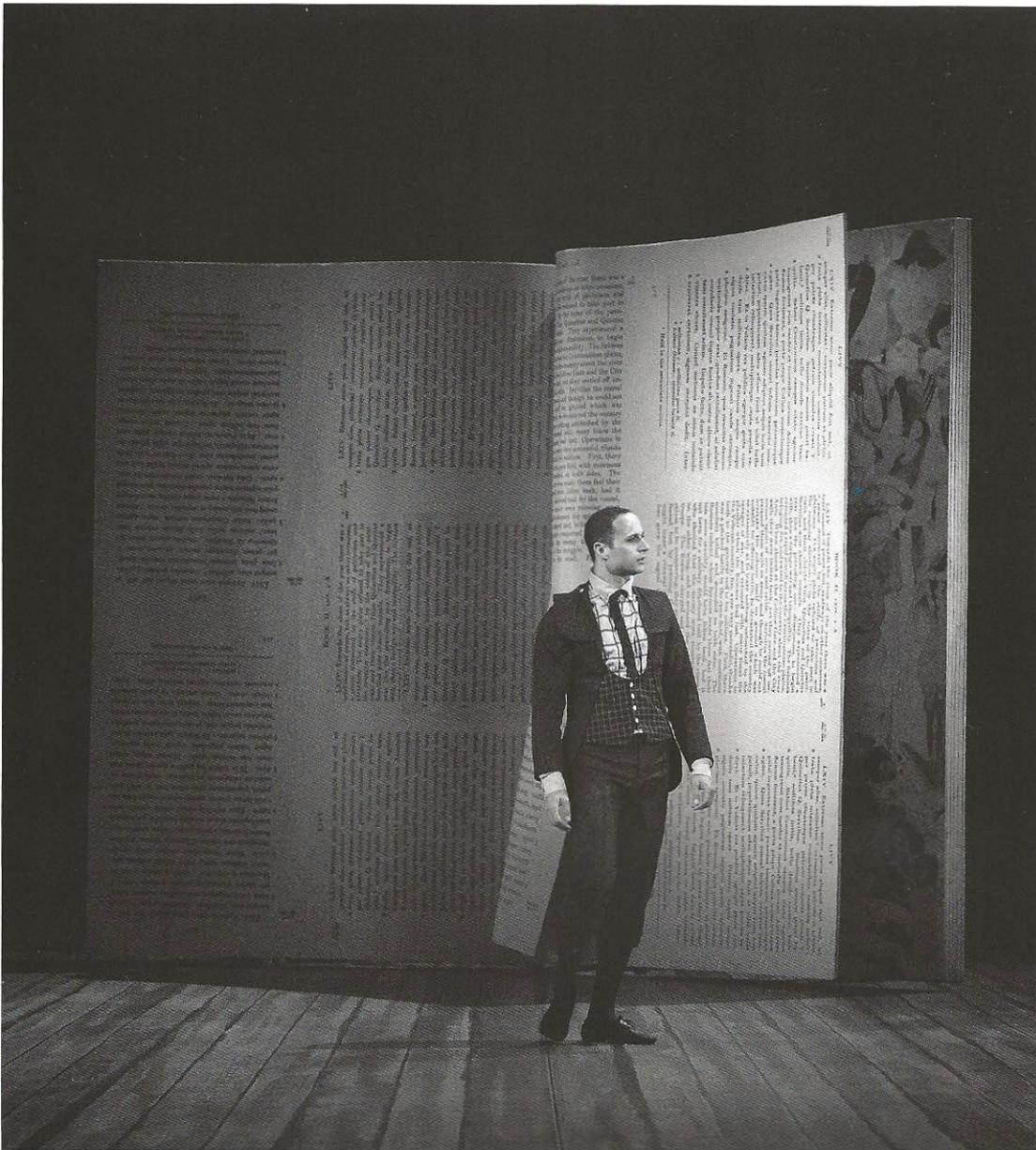
OCTOBER 2019
SHINSHOKAN

スウェーデン・ロイヤル・バレエ「審判」

ブベニチエク、カフカに挑む

パリ・オペラ座の元エトワールで現在カンパニーの芸術監督を務めるニコラ・ル・リツシュがイリ・ブベニチエクに新作全幕バレエを委嘱。カフカの不条理の世界がバレエになった。

グレアム・ワッツ Graham Watts

『審判』(ブベニチエク振付) アーセン・メーラビャン Arsen Mehrabyan in Jiří Bubeníček's *Procesen*. © The Royal Swedish Opera/Sören Vilks

DATA

5月17日～6月12日/スウェーデン王立歌劇場
 振付:イリ・ブベニチエク
 音楽:アルフレート・シュニトケ、アルヴォ・ベルトほか
 舞台美術:オットー・ブベニチエク
 衣裳:ナディナ・コジョカル
 出演:アーセン・メーラビャン、デジスラワ・ストエワ、ダリア・イワノワ、ナム・ミンジ、ジェローム・マルシャンほか

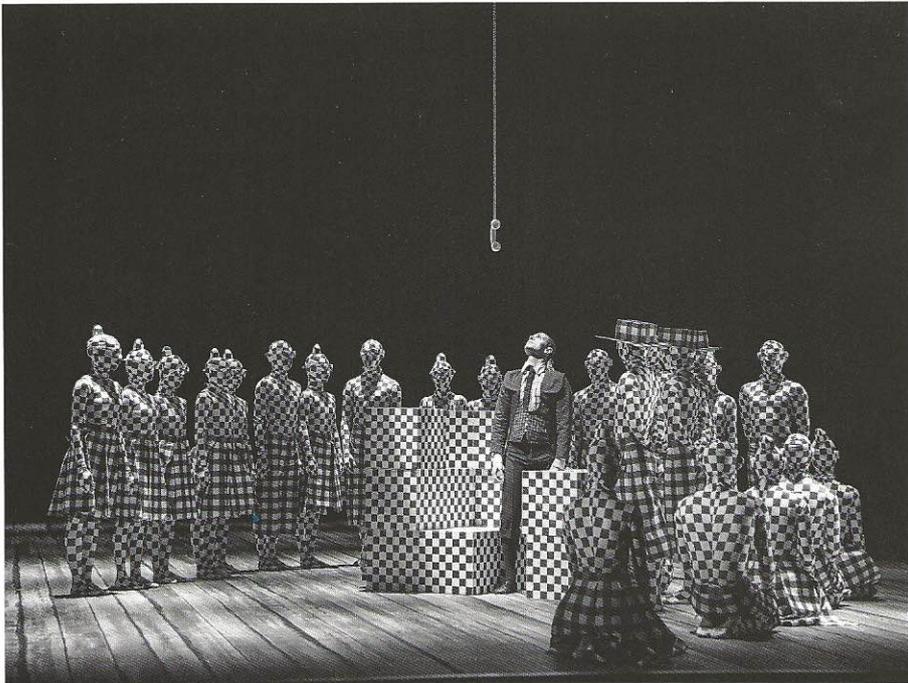
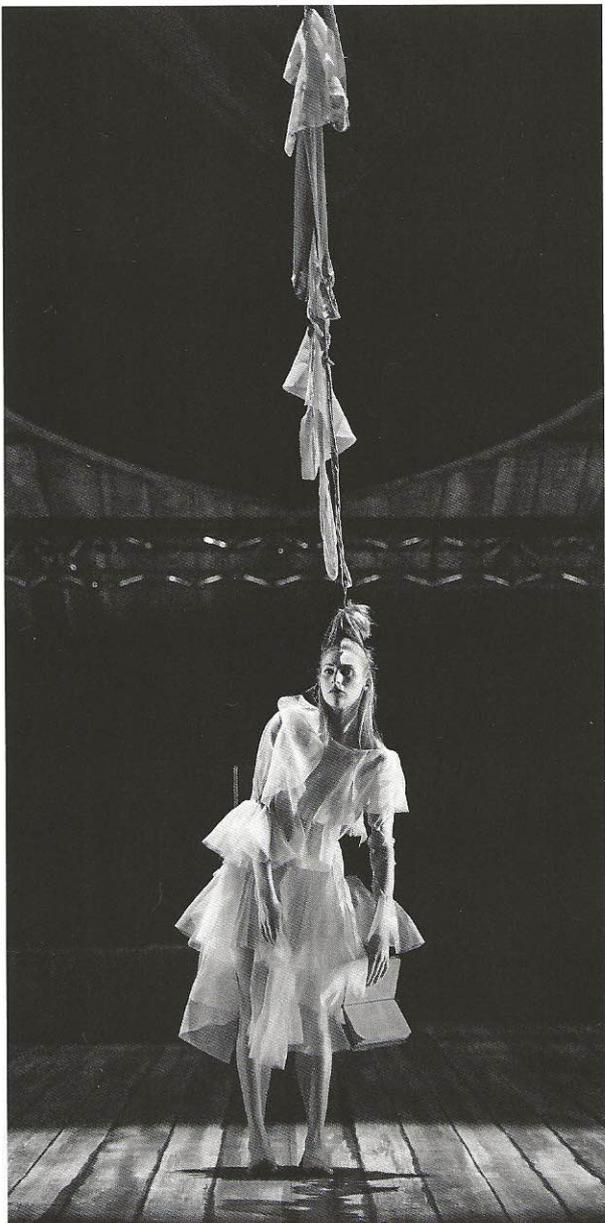
フランス・カフカの未完の小説『審判』は迷路のように入り組んでおり、バレエにするには困難を極める。しかしイリ・ブベニチエクはカフカの二作品を混化させることによって、バレエの導入をはかった。まず、カフカの『変身』に想を得た巨大な繭を舞台に吊り下げ、それからコンピュータグラフィックスの映像処理で『審判』——罪と不可解な自律性の物語——の主人公ヨーゼフ・Kをカフカ自身に整容させた。

不条理が連続する『審判』を各五十分の二幕に収めるのは難しい作業だが、ブベニチエクにはそれを可能にする素地があった。彼は作家と同じくチェコのプラハ出身であり、振付家としての経験を積みながら、つねにこの小説——一九一四年から五年にかけて執筆され、作家の

死後の一九二五年に発表された——を心にあたためてきた。

ブベニチエクがヨーゼフ・Kの多面的な物語をかくも完全に表現できたのは、ファミリアの成功といえる。視覚的效果が素晴らしく、それがこの作品に力強い脈動を与えた。秀逸な可動性の装置を考案したのはブベニチエクの双子の兄オットー、創造性豊かな衣裳を制作したのはイリの妻ナディナ・コジョカルである。銀行員のヨーゼフ・Kが第一回の法廷審理を知らされる場面は劇的だ。通達は蠅からぶら下がる旧式の電話機から伝えられる。主人公のまわりを取り囲むのは、誰が誰とも見分けの付かぬ、頭から爪先まで黒と白のチェック柄の衣裳をまとった、まるで人間チェス盤のような同僚たち。その周囲にはやはり無機質な箱が並んでいる。このシンプルだが強烈なデザインは相乗効果を発揮し、カフカが原作の核心に据えた顔のない、非人間的な官僚機構を完璧に可視化してみた。

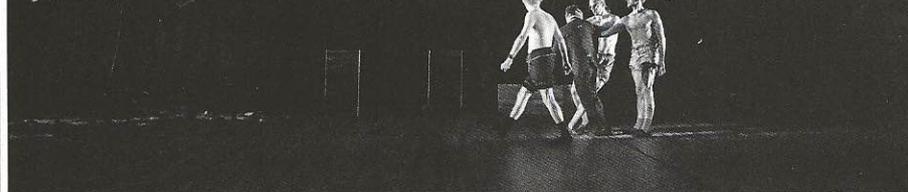
舞台人は、たとえばヨーゼフ・Kなどの重要な役を演ずるためにキャリアを積み上げるの



I lost the capacity to talk.

And I could never understand why you were insensitive to the sorrow and shame you inflicted on me with your words and judgements - it was as if you didn't sense your own power.

We had to examine in all its details, from all sides, this terrible trial that is pending between us and you, a trial in which you keep on claiming to be



3点とも「審判」左：ダリア・イワノワ Left: Daria Ivanova in Jiří Bubeníček's *Procesen*. Photos © The Royal Swedish Opera/Sören Vilks

だ、と言えるかもしれない。アーセン・メーラビヤンの場合がまさにそれで、スウェーデン・ロイヤル・バレエを去る今シーズン、この役を初演する榮譽を得た。カフカの原作どおり、メーラビヤンはすべての中心に存在しながらも傍観者である。ときには大胆に、冷静に、あるいは無残になる。彼に迫りくる出来事进行操作することも、彼の周囲を取り巻く関係を認可することもできず、いかなる意義も見いだせない。カフカ自身、女性とうまく関係を結べない人だった。ブベニチェクは「審判」に登場する女性全員を前面に出すことにより、ヨーゼフ・Kと女性とのつながりにカフカの白伝的要素を反映させた。

作品には、スウェーデン・ロイヤル・バレエの卓越した女性ソリストの見せ場がふんだんに盛りこまれた。デジスラワ・ストエワは官能的なビュルストナー嬢。ヨーゼフ・Kを誘惑してキスをするよう仕向けながら、その後に口説かれてもはねつける女だ。ゴジョカルが用意した赤いハイヒールと唐辛子の髪飾りが、その激烈な性格を際立た

せた。ダリア・イワノワは、延吏の浮気性の妻をユーモアを交えて演じた。ナム・ミンジは、弁護士の中で死刑囚の男に目のないレニを大胆に造形した。軽薄な法廷画家ティトレリと厳格な裁判所付き教師という相反する二役に配されたのは、ジェローム・マルシャン。教師はヨーゼフ・K/カフカに、裁判の行方が思わしくないことを告げる（この〈審判〉の世界で無罪を勝ちとった被告は誰もいない）——したがってなぜ訴えられたのか、どんな不利な証拠があるのか一切わからなくても、自分の運命を受け入れなければならぬのだ、と。

チーム・ブベニチェクはヨーゼフ・Kが落ちこんだ迷宮物語を見事に捉え、簡潔明瞭な語り口、スピーディーな展開、圧倒的な美術で表現することに成功した。使用音楽——アルフレート・シュニトケやアルヴォ・ペルトをはじめ約十六名の作曲家と民族音楽——は、あらゆる雰囲気をつかなく伝え、コーエン・ケッセルスの指揮により臨場感をもり立てた。

(訳・堤理華)